NISHINOMIYA EBISU

西宮 えびす

平成二十四年 夏号

えびす
NISHINOMIYA EBISU
平成二十四年 夏号

西宮えびす 平成二十四年夏号（通巻第三十七号） 平成二十四年六月一日 発行
発行／西宮神社 〒662-0974 兵庫県西宮市社家町1-17 電話 0798-33-0321 FAX.0798-33-5355
編集／文化課 印刷／小西印刷所

～第五十回 西宮太々講社神楽祭～ えべっさん こどもまつり

新緑が鮮やかに境内を彩る中、五月一日～十日まで各崇敬講社が日ごとに神楽を奉納し、ご祈願致しました。中でも五月五日の「こどもの日」に行われる「西宮太々講社神楽祭～えべっさんこどもまつり～」は境内一円子ども達で大賑わい。

勢ぞろいした「ゆるキャラ」

こどもミニ新幹線

西宮太々講社神楽祭は本殿復興間もない昭和三十八年に再興されてより、今年は五十回を迎え、記念行事として、西宮中央商店街の「ふくみみ福ちゃん」を始め、関西各地のゆるキャラが勢ぞろい。お祭りをより賑やかにしてくれました。

賑わうバザー

INFORMATION インフォメーション

西宮神社会館 えびす万燈籠特別ディナー『灯の夕べ』のご案内

真夏の夜、境内では揺らめくろうそく、神池には天の川の煌めく『えびす万燈籠』。

西宮神社会館ではリーガロイヤルホテルによる特別料理を御用意しております。今年は食事に合わせ会場内ではクロースアップマジックと、原笙会による舞楽が上演されます。

万燈籠特別ディナー

- ●**日時** 平成二十四年**七月二十日(金)** 午後六時～(受付 午後五時半～)
- ●**お一人** 税込**五千円**(限定八十名様)
- ●**締切** 七月十日(火)まで

万燈籠特別メニュー

- ・生ハムと無花果 小さなサラダと赤ワインのジュレ
- ・鮪の炙り コリアンドル風味の夏野菜マリネ添え
- ・冷製コーンスープ
- ・鱧と帆立貝柱香味バター焼き
- ・オレンジのシャーベット
- ・ポークフィレのカツレツ ミラノ風 サフランライスと温野菜添え トマトソース
- ・胡麻のブラマンジェと季節のフルーツ
- ・パンとバター
- ・コーヒー

●**お問合せ先** 西宮神社会館
(TEL 0798-(23)-3311)
http://www.jinjakaikan.com

奉納 こども相撲大会 出場者募集

○**日時** 平成二十四年 七月八日(日) 午後一時開始(小学生の部)
※開始時刻の二十分前までに受付へお越しください
○**会場** 西宮神社本殿西広場
○**応募資格**
●一般の部 幼稚園児(男女混合)
小学校一～六年生(男子、女子)
●経験者の部 小学校一～六年生(男子)
※経験者とは相撲クラブ・団体等に所属されている方です
※経験者の方は一般の部には申込み出来ません
○**申込方法** 申込書に必要事項を記入の上、社務所までお申込みください。
申込締切 **六月二十四日(月)必着**

お問合せは西宮神社(TEL0798-33-0321)各担当までお願いします。

twitterで最新情報を

当社ではえびす信仰をより広く多くの方に知って頂こうと、携帯サイトやパソコンホームページなどで当社の由緒・祭典・行事等を配信してまいりました。それに加え、より迅速にリアルタイムでの情報配信ができるツイッターでもお知らせしております。どうぞご利用ください。
http://twitter.com/nishi_ebisu

twitter

西宮神社 公式サイト 検索
http://nishinomiya-ebisu.com
西宮神社公式携帯サイトQRコード

編集室から

●新緑の鮮やかな境内、昨年整備された神池では菖蒲が咲き、藤棚では紫・白の藤が鮮やかな花を咲かせておりました。春休み子供会の開催報告は前述したとおりですが、その際に石井先生の話の中にえびすの森は大きな木が多く若い木が育っていないという話をされていました。今回の植樹は将来を担う子供達の手により将来の森を形成する木を植樹をするという考えにより開催されました。子供達により植えられた挿し木苗の成長を見ていただく機会を設けていけたらと考えております。

さて当社では恒例の行事に加え、新しい行事も行っております。中でも「夏えびす」は、十日えびすのちょうど半年後の荒戎神社の例祭を中心に「夏えびす」として、「七夕天の川」や「あらえびす神社夜まつり」などを加え賑々しく行っております。

どうぞご家族お誘いあわせ御参拝ください。

古河大工町恵比寿神社

【鎮座地】茨城県古河市中央町三丁目九-一　氏子総代　田上慶之助　服部　徹也

古河市は茨城県の西端に位置しておりますが関東地方のほぼ中央にあり、近世は徳川幕府の要職をつとめた有力譜代大名の城下町として栄えてきたところであります。

当恵比寿神社はJR宇都宮線、古河駅西口から徒歩八分位のところ中央町三丁目（旧町名大工町）に鎮座しております。境内に立つ二基の石碑によれば、創建は文化十一年と誌るされております。初期の社殿は現在地よりやや南の同町内、佐藤某氏の一郭に造営されておりましたが、風雪百年を経て大破したため、明治四十五年三月に氏子総代、世話人等が相謀り広く寄付金を募集して、現在地を購入し旧社殿を修繕して遷座したものであります。碑文には、古くより大工町の氏神としてまた広く関東一円の方衆の崇敬篤く霊験顕著を以って聞こゆ、とありますが当時の寄付者のご芳名を見ると地元古河に始まって、茨城県内はもとより東京、横浜から、前橋、高崎、伊勢崎の北関東に至る広範囲の方々の奉賛をいただいているのに驚かされます。百年前の各地域の有力商業者の盛んな様子とえびす様に対する深い尊崇の念が偲ばれます。

「西宮大神」扁額

「西宮蛭子神社大神廣前」幟旗

大工町恵比寿神社

当社に参詣して先ず目に入るのが、拝殿正面の「西宮大神」の扁額です。摂津西宮神社の御分霊であることを表わしています。揮毫は幕末から明治に活躍した古河の文化人武藤松庵の筆になるもので、他に「西宮蛭子神社廣前」と大書した長大な幟旗も二流残されています。松庵は幕末維新の頃の写真術でも知られ、廃城前の古河城の唯一の貴重な写真をのこしています。また、華道家元池坊専正の高弟として宗家を支えて各地に出張教授し、その著書「花心粧」は池坊華道の古典として現代に至るまで大きな影響を与えています。

平成三年遷座八十年を期に社殿の大修復を行いましたが、その折、本殿背面に墨書があることが発見されました。

「宝暦十一年、辛巳一月吉日、奉、江戸神田住浅野彦兵衛」これは碑文にある文化十一年より更に五十三年も古いこととなり、現在この墨書を解明する他の史料が見つからないので石碑に刻まれた創建の年代との開きを読解くことはできません。郷土史家の石川先生は文化年間、大工町に蛭子命を祀った時にこの本殿を何処からか譲り受けてきて安置したとも考えられると書いておられます。

昨年三月十一日の東日本大震災では社頭の一対の石燈籠のうち右の燈籠が倒壊いたしましたが町内一致協力してこのほどようやく、立派に再建いたしました。今後子々孫々まで大切に護持していくことを念じております。

本年、平成二十四年は鎮座二百年の記念すべき年を迎えます。六月十七日には鎮座二百年の大祭を挙行する予定でおります。近年は町おこしの一環として市内七福神めぐりも盛んになり市民のえびす様に対する認知度も上っております。ご先祖様の時代に比べ信仰心の希薄な現代人にも心のふるさととして親しまれますよう祈念いたしております。

文化研究所だより（一）

江戸時代の神職組織について

前号まで長らく続いてまいりました「えびす瓦版」を引き継ぎ、今号より「文化研究所だより」をお送りいたします。社務日誌である「御社用日記」や諸国のえびす信仰史料から、江戸時代の西宮神社やえびす信仰のあり方などを紹介していきたいと考えています。

さて、初回は江戸時代のうちでも一八世紀初頭の西宮神社の神職組織について紹介したいと思います。まず、神職の構成ですが、頂点は神主であり、現在も宮司をつとめている吉井家が世襲していました。神主の次位は社家（しゃけ）です。上官（じょうかん）と中官（ちゅうかん）の区別があり、上官は中村・浜・東向・田中の四家、中官は鷹羽が二家ありました。神主・社家は神社の北隣（現在の西安寺付近）や西宮町内に居宅を構えていたようです。社家の次位は祝部（はふりべ）（祝子（はふりこ））と呼ばれる神職で、西宮町近隣の中村・広田村に住んでおり、半農半神職のような身分でした。中村在住の堀江・大森二家・橋本と、広田村在住の広瀬・田村です。その他として神子（みこ）がいます。成尾（なるお）屋・紅（べに）屋・瓶子（へいし）屋など、元禄期には二〇人ばかりがいたようです。現在と異なり全員男性です。屋号を有していることから、西宮町内在住の町人と考えられます。神子は神事行為を行うことが許されていないため神職とはいえません。神事行為とは、装束を着用して神祈祷などを行うことと考えてよいでしょう。彼らは神事の際、あるいは平日は現在の祈祷殿の場所にあった神楽所に詰め、参詣者の要望に応じて神楽を奉納することが第一の職務でした。

また、神主から祝部までの神職内でも、つとめることができる神事行為が決まっていました。それを端的に示す一節を「御社用日記」から抜粋してみましょう。

「十二月朔日、広田・南宮・西宮月普（並）之神供進上、祝詞神主宮内勤之、社司中臣祓勤読、祝部神供運送、神子庭神楽」（元禄十年〔一六九七〕）

これは、毎月朔日に広田社・南宮社・西宮（戎）社[1]で行われる月並（つきなみ）神事勤仕の様子ですが、祝詞奏上は神主吉井宮内（くない）良信[2]、中臣祓勤読は社司（社家）、神供（しんく）の運送は祝部、庭神楽は神子が、それぞれつとめていることがわかります。その神事の願文たる祝詞の奏上は神主のみが行える行為であり、以下序列に応じて従事する神事行為（神楽は除く）の重要度は下がっていきます。

写真一　冠・紅衣

神事以外の場面での神職の序列を示す事例として、同じく「御社用日記」から宝永六年（一七〇九）六月二一日の尼崎藩主青山幸督（よしまさ）[3]社参をみてみましょう。注目するのは装束と出迎え場所です。

「六月廿一日明六つ半ニ青山播摩（磨）守様御社参被遊候、如例之神主宮内儀冠・紅衣着用、御神前広間ニ着座、（中略）社家ハ布衣・烏帽子、祝部八黄衣・烏帽子ニ而、東唐門手洗石之所迄罷出御目見江申上候、神主ハ其侭神前ニ而御対顔」

写真二　布衣・烏帽子

神主は冠・紅衣（こうい）着用にて神前広間に着座、社家は布衣（ほい）・烏帽子着用にて、祝部は黄衣（おうえ）・烏帽子着用にて東唐門（表大門）付近の手洗石のところまで出迎え、となっています。視覚的にも序列がよくわかります。ちなみに、ここに神子は出てきていませんが、彼らの装束は立烏帽子・水干（すいかん）です。

写真三　黄衣・烏帽子

現在の神職も神事などの際には役職・階位などにより装束・服務内容は異なっており、何らかわらないようにもみえます。しかし、神事のみならずあらゆる事柄にわたりこの上下関係が反映され、しかも生まれながらに規定される点が身分制社会の特質なのです。

ただし、今回お話ししたようなあり方は、一八世紀初頭段階では必ずしも厳密であったとはいえず、論点をかえつつ争論が続発します。この時代は西宮神社にとって神社内秩序が紆余曲折を経て確立する重要な時期だったといえます。この点についてはまた別の機会にご紹介したいと思います。

（西宮神社文化研究所主任研究員　松本和明）

（1）江戸時代まで広田・南宮・西宮の三社は一体であり、神事・運営なども西宮の神職が行っていた。
（2）四五代神主。位階は従五位下。生没年は延宝三年（一六七五）～寛保二年（一七四二）。
（3）官位は従五位下播磨守。生没年は寛文五年（一六六五）～宝永七年（一七〇）。当時西宮は尼崎藩領であった。
※写真の装束は現在のものです。

おこしや祭

六月十四日（木）

びわ娘も加わった行列

本殿発輿祭
於 本殿　午後二時

えびす様を神輿にお遷しするお祭りをします。

おこしや（御輿屋）祭
於 おこしや跡地　午後三時

おこしや跡地にて巫女が神楽奉納を行います。また祭典後、びわ娘・福男からビワ一袋を先着三百名の方にお渡し致します。

還御発輿祭
於 おこしや跡地　午後九時

本社還御祭
於 本殿　午後九時半

巫女による神楽奉納

えびす様御鎮座伝説

『昔々、鳴尾の漁師が沖で漁をしていたところ、網に御神像が掛かったのですが、魚ではなかったので海にかえしました。今度は神戸の和田岬辺りで網を入れたところ、先程と同じ御神像が掛かりました。これは恐れ多い事と思い、家に持ち帰りお祀りしていたところ、ある夜「西の方に良き所があるのでそこにお祀りするように」との託宣があり、村人一同でえびす様の御神像を御輿に乗せて出発しました。途中で一休みされたえびす様は、居眠りをされてなかなかお目覚めになりません。困った漁師は神様のお尻をひねってお起しして、さらに西へ進み、今の西宮神社の地に落着かれたといわれています。』これはこの地方に残るえびす様の御鎮座伝説ですが、この「休みされた所が「おこしや跡地」として今も残っております。

大道芸

びわ娘によるビワの授与

スタンプラリー

午後四時～午後七時

本殿前・赤門・あらえびす神社・戎座人形芝居館・おこしや跡地に設けてあるスタンプを集めた方、先着四百名にプレゼントをお渡しします。

※スタンプ用紙は神社にて配布しております。

昔なつかし縁日屋台

午後三時～八時

金魚すくい、わらびもち、ヨーヨーつり、たこせんべい、たこやき、ぽん菓子など。ゆかたを着たお子様はいずれか一回無料です。

縁日屋台

夏えびす

「正月十日えびす」に対して七月は十日を中心に「夏えびす」として様々な神事行事が行われます。

七月七日（土）

七夕 天の川
夕刻～午後九時

神池にLEDライトの天の川が煌めきます。また七月七日の七夕の日には参道に立てられた笹に子ども達の書いた願い事の短冊がひらめきます。

十日（火）・二十日（金）の夜にも神池に天の川が出現します。

七夕短冊に願い事を…

LEDライトの天の川

七月九日（月）・十日（火）

あらえびす夜まつり
午後四時～九時

七月十日はえびす様の行動的な力強い荒御霊をお祀りしている荒戎神社（沖恵美酒神社）の例祭日です。

九日の宵宮と十日の夜は西宮のお店が勢ぞろい。夏えびすの夜を盛り上げます。

七月十日（火）

あらえびす神社祭
午前十一時

あらえびす神社は元々荒戎町に御鎮座しており、明治五年に当社境内に移転、鎮座いたしました。どうぞ例祭日にはあらえびす様へお参りください。

荒戎神社

七月七日(土)・九日(月)・十日(火)・二十日(金)
風鈴市開催

夏の風物詩、えびす様をかたどった風鈴や、いろいろな風鈴が境内にて販売されます。

七月二十日(金)
夏祭

午前十時

暑気払い・無病息災を願い夏祭が執り行われます。祭典後は拝殿前において湯立神楽が行われます。湯立神楽は穢れを祓う霊力があると言われる湯のしぶきを巫女が笹で参拝者にふりかけます。

夏祭

えびす万燈籠祭

午後六時

御神火が点灯された境内三三〇基の石燈籠と約五千個のろうそくの火が境内にゆらめきます。

えびす万燈籠祭の提灯

七月三十一日(火)
境外末社・住吉神社 夏祭

午前十時

七月八日(日)
奉納こども相撲大会

午前九時(幼稚園の部)
午後一時(小学生の部)

※募集要項は裏表紙に記載しております。

平成十八年より復興しましたこども相撲大会は年々参加者も増え活気を帯びて来ております。

江戸から明治時代にかけて現在の駐車場には土俵があり江戸時代には勧進相撲も行われていたようです。子ども相撲大会は昭和五十一年より行われておりましたが平成になり途絶えていました。平成十八年に復興してからは年々参加者も増え、ご家族も一緒に活気あふれる行事となっています。経験者だけでなく、初めてのお子様や、女の子も楽しんでご参加いただけます。

平成二十三年小学校の部入賞者

平成二十三年幼稚園の部入賞者

昭和51年子ども相撲大会

九月例祭
西宮まつりを支える人たち(一)

西宮まつりは当社氏子区域である浜脇・用海・安井・香櫨園の四地区の交代制にて、担当地区の方が中心となりお祭りを支えます。今年の担当地区は用海地区です。ここでは西宮まつりを支える方々の一部を紹介します。

氏子奉幣使

氏子幣を供える浜脇地区氏子奉幣使 稲田忠男氏(例祭)

氏子奉幣使はその年の担当地区から選ばれ、例祭では氏子を代表して神前に幣帛を供え、全氏子区域の平安を祈る祈願詞を奏上します。

蒲団太鼓台

蒲団太鼓台を曳く神輿奉賛講社の子どもたち(子ども樽みこし)

平成十八年に復活した蒲団太鼓台は浜脇中学校男子生徒や神輿奉賛講社講員によって担がれます。

中でもかわいらしい子どもたちによって叩かれる小さな太鼓台は見る人の気持ちを朗らかにします。

若戎会だんじり

赤門を出る若戎会だんじり

氏子青年会によって曳かれる猛々しいだんじりは祭りをより一層盛り上げます。だんじりは西宮まつり三日間を通して氏子区域を練り歩きます。

浜脇中学校生徒

浜脇中学校ブラスバンド部(子ども樽みこし)

女みこしを担ぐ浜中女子生徒(子ども樽みこし)

西宮神社の南にある浜脇中学校ブラスバンド部は、二十二日夕刻阪神西宮駅南にあるダイエーグルメシティ西の舞台にて演奏します。またバトン部が子ども樽神輿の行列と共に巡行する他、蒲団太鼓台には男子生徒有志、女みこしには女子生徒有志が参加しています。

童男・童女・八乙女

平成23年童男 森大和君(例祭)

行列奉仕する八乙女(陸渡御)

神楽「豊栄舞」を奉納する童女(渡御祭御旅所)

八乙女は四地域から二人ずつ選ばれた八人の女性が十二単を着て奉仕し、童男は小学生以下の男の子、童女は小学校高学年の八人が担当地区より選ばれます。

童男・八乙女・童女は選ばれると認証奉告祭にてえびす様に奉告をし、例祭、渡御祭で奉仕する作法などの指導を受けます。童女は渡御祭にて神楽「豊栄舞」を奉納する為、神職、巫女指導の下、幾度となく集まり練習をします。

渡御祭再興五十回記念

西宮まつり

平成二十四年九月二十一日(金)～二十三日(日)

宵宮 九月二十一日(金)

宵宮祭 午後五時

奉納演芸会 午後六時

例祭 九月二十二日(土・祝)

例祭 午前十時

稚児行列 午後三時

こども樽みこし 午後五時半

渡御祭 九月二十三日(日)

発輿祭 午前十時

陸渡御 西宮中央商店街・用海地区

御旅所祭 用海地区 正午頃

海上渡御 本船団 出航 午後二時

かざまつり 午後二時半頃

分船団 午後一時十分 えびす様と縁の深い和田神社・三石神社へ向って産宮船を出します。

和田神社・三石神社参拝 午後二時半頃 和田神社・三石神社へ参拝します。

還御祭 於本殿 午後四時五十分

氏子青年会「若戎会」のだんじりが三日間を通して市内を練り歩きます。

※各行事は、天候等により変更となる場合がございますので予めご了承下さい。

渡御祭のあゆみ

渡御祭今昔

渡御祭は古くは平安時代末期、中山忠親の日記「山槐記」にも記されている歴史のある神事です。この頃は往路は幾艘もの船を旗や幕で飾り、海上を所狭しと渡御しておりました。和田岬の御旅所では時節の花を飾り、舞などを奉納した後、帰路は馬を連ね陸路を二十五キロその日の内に帰っていたようです。これを「産宮(うぶみや)まいり」と呼んだ事が寛永十一年(一六三四年)に西宮神主吉井良重らが幕府に提出した書状の覚書として残っています。同時にこの覚書から渡御祭が途絶えていたことが伺えます。

西宮大神本紀

戦後八年、戦災復興の気運高まる中、氏子崇敬者の間から渡御祭復興の声があがります。

陸渡御復興(昭和二十九年)

そして翌昭和二十九年、氏子区域を神輿が神幸する渡御祭(陸渡御)が復活します。

平成十一年、阪神大震災からの復興を記念して海上渡御祭を復興しようという機運が高まり、氏子町内会や西宮中央商店街を中心として「西宮まつり協議会」が結成、約四百年ぶりに海上渡御祭が復興し、平成二十三年には海上渡御祭復興十周年を迎えました。そして今回は渡御祭再興五十回を迎えます。

海上渡御復興(平成十二年)

海上渡御復興十年
(和田岬にて平成二十一年)

海上渡御復興十年祭を終えて

奉納品

今年四月二十四日に満百歳を迎えられた市内にお住まいの片山正美様、黒松一樹を奉納されました。五月初め、ご親族の方々と参拝されましたが、明治の末年の生まれとは言え、明治の精神を誇りに生きてきた、と穏やかなお顔で気骨のあるお話をして下さいました。

また五月十三日に結成十周年となる西宮ホワイトライオンズクラブ様からは、その名に相応しい陽光桜が奉納されました。当社は桜樹が少なく、松の緑の中の彩りとなってくれることでしょう。

一昨年一月付けの話となりますが、毎年十日えびすに揃って参拝していたお仲間六人で山桜の献木もありました。

いづれも六英堂表門付近に植えられています。

昨年の本殿復興五十年を記念しての「黄金えびす」の額が、明石の西産表装工業様より届けられました。御神影札のお姿が金色に輝く飾額です。

山桜を献木されたお仲間

黒松を献木された片山様

西産表装工業様より奉納された黄金えびすの額

陽光桜を献木されたホワイトライオンズクラブ様

本殿復興五十年記念事業に伴う表彰

一昨年、本殿復興五十年を記念して新築された**祈祷殿と改修いたしました神池**について、二つの賞を頂戴いたしました。

（兵庫県）**第十三回人間サイズのまちづくり賞、まちなみ建築部門**
「奨励賞」（平成二十三年十二月十六日）

（社団法人大阪府建築士会）**第四回建築人賞**
「建築人奨励賞」（平成二十四年五月三十日）

二つの賞を受賞した祈祷殿と改修された神池

また、同じく記念の文化事業として編纂された**「近世諸国えびす御神影札頒布関係史料集」**発刊に対し、財団法人神道文化会より**「神道文化功労者」**の表彰を受けました。（平成二十四年五月二十五日）

「近世諸国えびす御神影札頒布関係史料集」は江戸時代より続く当社御神影札を配る各地の講社や分霊社関係への文書などを集め活字化したものです。

「春休み・えびすの森観察会」開催

西宮神社の境内は、甲子園球場とほぼ同じ面積の約一二、七五〇坪、四二、〇七〇㎡で、境内北西部分約三、九二〇坪、一三、〇〇〇㎡は、昭和三十六年兵庫県より天然記念物に指定されています。

平成十五年から神戸大学大学院森林資源学研究室の石井弘明准教授を中心とするグループにより、当社の社叢の植生管理とボランティアによる社叢管理の可能性が探られてきました。平成十六年には外来種のシュロの除去作業や枯枝の伐採作業が、平成十九年からは社叢内の楠木から採取した挿し木苗の育成観察などが学生らによって進められてきました。又、毎年十一月には、えびすの森の公開と清掃奉仕を一般市民を対象に行ってまいりましたが、今回はこの森の楠の大木から採取された挿し木苗を元に戻し植樹する試みを、主に地元の小学生四、五、六年生の子供らとともに行う「春休み・えびすの森観察会」を開催しました。

三月二十四日午前九時半より六英堂にて受付開始、十時開会。

先ず主催者挨拶、開催経緯、概要説明。次に神戸大石井先生より指導員紹介、続いて講義。「えびすの森を守る」のスライドを交えた解説。十一時から森林に入り、樹木の計測、観察及び即製のブランコでも遊びました。

熱中して時間オーバーしました。

昼食・休憩後、十三時から主目的の楠の苗木の植栽を行いました。神社に戻ってきた苗木の内、無事育った四本を境内南西角の一角の日当たりのある場所を選び植樹。あらかじめ樹木医により耕された所に、更に腐葉土を混ぜる作業を参加者全員で行い適宜の穴を掘り、鉢植えの苗を取り出し大地に植え潅水しました。朝からやや強い風とにわか雨が続きましたが、㈱深秀園の樹木医の協力も得て大過なく終了しました。

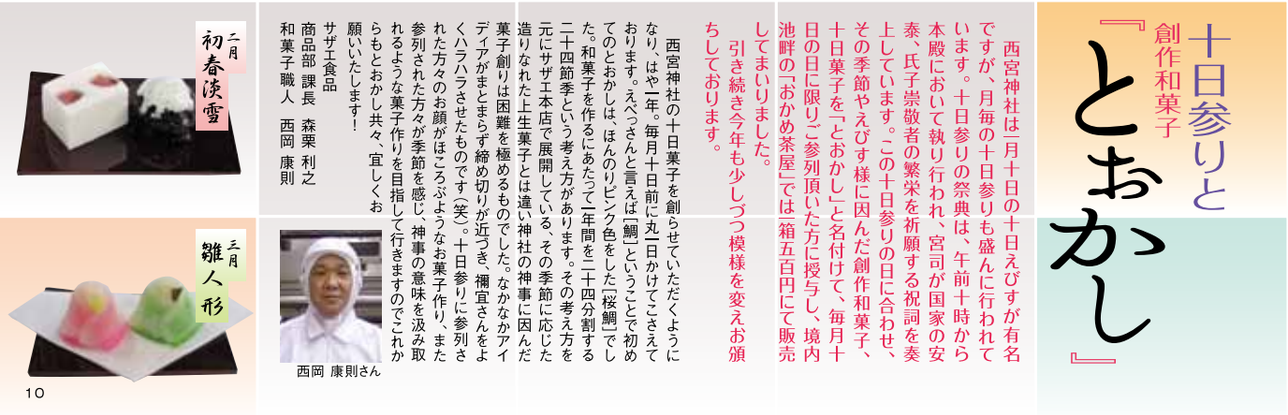
スライドを見ながらの解説を聞きました

楠の苗木を植栽しました

樹木の計測

参加した子どもたち

十日参りと創作和菓子『とおかし』



西宮神社は一月十日の十日えびすが有名ですが、月毎の十日参りも盛んに行われています。十日参りの祭典は、午前十時から本殿において執り行われ、宮司が国家の安泰、氏子崇敬者の繁栄を祈願する祝詞を奏上しています。この十日参りの日に合わせ、その季節やえびす様に因んだ創作和菓子、十日菓子を「とおかし」と名付けて、毎月十日の日に限りご参列頂いた方に授与し、境内池畔の「おかめ茶屋」では一箱五百円にて販売してまいりました。

引き続き今年も少しづつ模様を変えお頒ちしております。

西宮神社の十日菓子を創らせていただくようになり、はや一年。毎月十日前に丸一日かけてこさえております。えべっさんと言えば「鯛」ということで初めてのとおかしは、ほんのりピンク色をした「桜鯛」でした。和菓子を作るにあたって一年間を二十四分割する二十四節季という考え方があります。その考え方を元にサザエ本店で展開している、その季節に応じた造りなれた上生菓子とは違い神社の神事に因んだ菓子創りは困難を極めるものでした。なかなかアイディアがまとまらず締め切りが近づき、禰宜さんをよくハラハラさせたものです（笑）。十日参りに参列された方々のお顔がほころぶようなお菓子作り、また参列された方々が季節を感じ、神事の意味を汲み取れるような菓子作りを目指して行きますのでこれからもとおかし共々、宜しくお願いいたします！

サザエ食品
商品部 課長　森栗 利之
和菓子職人　西岡 康則

西岡 康則さん